

至誠

明治神宮武道場
至誠館 館長

荒谷 卓

成果より努力の過程が大事

武道に限らず、道と名のつく稽古事は、その成果（プロダクト）よりも努力の過程（プロセス）が重要視されます。つまり、自分の外にある基準に照らし合わせて答えが正しいということよりも、自分自身の体験を通じて得た自分の内面的「学び」を体現することを重視しているのです。

明治27年1月20日から昭和41年8月17日に存命した武術家で、幾多の他流試合を相手の望む通りの条件で受けながらも勝ち続け、生涯不敗という圧倒的な武の実力を有していた鹿島神流の国井善弥先生は、自らの厳しい修行経験から「初において身体を整え、中において心気人倫を養い、極めては宇宙創元の理を悟る。これが鹿島神流の奥義である」と言っています。武道を通じての「学び」のプロセスは、身体の

調整・開発から始めて、心と気力の充実・人倫道德の養成へと進め、宇宙の一員としての感性を高め宇宙の摂理を知ることだということです。まさに無限の「学び」と「生成」の連続です。そのプロセスの随所にプロダクトは存在するのですが、一つ一つのプロダクトが目的ではなく、その母体としての人間の成長によって、プロダクトそのものが常に進化・発展を持続することを目的としているのです。

武には、武芸（技）、武術、武道という階層があります。武芸（技）は技法（テクニク）であり、武術は人の思想や哲学、武道は天（自然）の道理ともいえるでしょう。稽古のプロセスは芸に始まり、術を練り、道を開くという順になります。天の道理が理解できた後は、それに適うよう、人としての思想と生き方を探求し、それをまた技法に顕わすと言うリサイクルを繰り返

すわけです。

ですから、武芸を始めたからといって、最初から天の道理が分かるわけでもないし、自分の生き方が定まるわけでもありません。先ずは芸（型）の稽古から入ることになります。ここで大事なのは、型を真似て終わらないことです。往々にして、型ができると「出来た」と勘違いすることがありますが、「型」は学びの箱、あるいは道具に過ぎません。「型を覚える」、「技を身につける」、「試合に勝つ」などというのは、初心の目標であって、あくまでもファーストステップです。ましてや、芸におぼれ、やたらといろいろな武芸に手を出して技をひけらかすようでは、浅瀬でバシャバシャして泳ぎを覚えたのと勘違いしているようなものです。それは、術にも道にも繋がらないばかりでなく、それがその人にとっても社会にとっても役立つことはないでしょう。

武術は、相手と相対するときの理合いです。一対一、一対多、多対多の戦理を学び、そこから人との関わり方を探求することになります。

人間関係は、つまるところ人と人の心の関わりといっても差し支えないでしょう。力や技で勝利しても、相手が負けを認めず、かえって敵意を増せば勝利とは言えません。逆に、相手の心を読み、我が心と調和できれば、力や技に頼らなくとも相手の戦意を友情に変えることもできます。誰でも「自分の気持ちをよくわかってくれる人」には好意を持つように、戦いにおいても心が通じれば戦意は鎮まるものです。

その前提となるのは、自分で自分の心を吟味できるといことです。なぜなら、自分の心を観察できない人が他人の心を観察できるはずがないからです。自分自身の内省を深めた人だからこそ、他人の心を我が心として考えることができるのです。自分の内省から「人とは何か」を探求し、相手との関わりから「社会とは何か」を探求する中で、自分の生き方を見出すことができるようになります。

内省と感性

次に、人の心を知るにはどうしたらいいでしょう。例えば、国井先生は、武道の修行中、師から毎日「あれを持ってこい。これをあそこに置け」という指示をされ、「あれ」や「これ」は何

ですか、と質問すると大声で怒鳴られ拳固を食らったと言っています。当然、師が指す今日の「あれ」と明日の「あれ」は全く別のこともあるわけですね。こうなると、その時々々の状況と師の心情から察する勘所が良くないと「あれ」が何をさしているのか分かりません。この勘所が身についてくると、「気が利く」とか「空気が読める」ようになります。つまり、「あれ」や「これ」のやり取りを通じて、師の心情を感じ取る感性の修養を弟子にさせていたのです。

私自身、武芸を指導するときには、「ギョツと腹を張れ」とか「フワリとかわせ」という擬似音を使います。理論的説明を期待している人には、全く意味不明の指導でしょう。しかし、私自身が得た体感を人に伝えるには、こちらのほうが私の身体感覚を正確に言い表しているのです。感性豊かなアーティストは、いくらその感性を言葉で表現しようとしても物足りなさを感ずるがゆえに、音楽や絵画、彫刻や書で表現するのでしょう。コミュニケーションは、言語だけで為されるのではなく、感性によるコミュニケーションーションも重要なのです。

また、日本人はよく「気を使う」といいますが、これは、相手が言葉にしない心の状態までも感じ取るように「気」というエネルギーを使うことです。最近では、言葉ではっきり意志を伝達しないと相手の気持ちから分らない人が多いうようですが、人には、相手が言葉を発しなく

とも相手の心を感じ取る「気遣い」の能力があります。

武術ではこの感性を「勘所(かんどころ)」といい、具体的には「呼吸」や「間合い」と言います。

「呼吸」とは、例えば「呼吸を合わせる」というと、相手と気持ちを合わせることをいいます。また、「呼吸が乱れる」とは心の動揺や気持ちの不一致のことを言います。

「呼吸」は「息(いき)」とも言います。呼吸が深く持続することを「いきが長い」と言いますが、これはまた心身がタフで一つの仕事を長期間続ける持続力があることを表します。「いきが長い」人は文字通り「長生き」することになります。

「間合いが悪い」と言うときは、相手との距離や位置関係が不適切であるということです。また、「間が悪い」となると、行動や発言のタイミングが悪く、その場の状況を正しく把握できずに場違いなことをしたということになります。「呼吸」と「間合い(間)」を正しく読み取れるようになることが武道における感性の稽古になります。

稽古で感性を磨きながら、実体験を繰り返してつかんだ「呼吸」や「間合い」は、日常生活にも応用できます。「ああ、これは武術のこれと同じだな」といった具合に、武術の稽古での気付きが、普段の生活でも結構役に立つのです。

武術の稽古と日常生活が相互に関係を持ち、日常的な仕事や出来事が武術の稽古につながり、逆に、武術の稽古で得たことが日常生活に反映できるようにすると、稽古が面白くてしょうがないということになります。

ただし、ここで終わってしまうと、世俗的なレベルの武術に留まり、仕事や人間関係が改善されて良かった、といった程度に終わりがねません。そこからさらに、武の探求を自分の生き方に重ねて考えるようになると、武術が精神的な武道へと昇華します。



「道を開く」ということは、自然の摂理を理解して生き方を確立すると言うことです。武道の学びを自分のために役立てるだけでなく、周りの人々や社会のために活用し、さらには地球自然に貢献できれば、武道を实践できたといえるでしょう。武道は本来、帰属する社会や自然のために自分を鍛え、培った実力を社会や自然のために奉仕する生き方だからです。

では、どうすれば、武術の稽古から自然の節理を知りえるのでしょうか。

人間は自然の一員です。つまり、自分の中に自然の摂理が内在しています。だから、国井先生が言うように、初めに心身を整え、自己を内省して心気人倫を養い、他者との正しい関係や自然との正しい係わりを築くことは、心の感性を高め、内在する自然の摂理を発見するための大事なプロセスなのです。

人と人との係わりで養った感性を、次には地球自然に広げ、さらには宇宙に広げていくのです。そうすれば、自己と地球、自己と宇宙の係わりを強く感じてきます。これが自然の摂理の探求と呼ばれるものです。

そもそも感性とは、人間に備わった自然の認識能力で、人間と自然を結ぶ大事な絆のセンサーです。感性が貧困だということは、自然の本質を理解する能力が低いと言うことです。人間と宇宙や地球の自然とを結び付ける感性を

磨けば真理に気づく力が増します。だから、感性を磨くことは人間が自然の一員であることを自覚するためにも不可欠なのです。

その無意識の感性が、経験の反復によって訓練されて、自覚的に意識化されれば悟性になります。

感性は、生まれながらに人間が宇宙や地球の自然との関わりを認識できる無意識の能力で、悟性は自分が宇宙や地球の自然と深く関わっていることを意識化する能力と言ってもいいでしょう。そういう意味では、武道の鍛錬は感性を高め悟性を開発するプロセスともいえるかもしれません。

私はこれまで何度か、山中に籠って稽古をしました。自然のど真ん中に身を置くことで、自然を見て、聞いて、嗅いで、触って、地球に生きる自分、宇宙に生まれ宇宙に生き宇宙に死ぬ自分を感じるのです。

現代では、武芸の稽古は主に道場という人工空間の中で行うイメージが強いですが、戦いは本来、自然空間の中で行われます。そのため、天候・気象・海象を研究し、地形を分析し、昼夜・寒暖・植生を問わず常に戦に備える必要があります。

孫子には「敵を知り我を知れば百戦危うからず」とありますが、それでは不十分で、自然を知ることが、より大きな戦略眼に繋がるのです。つまり、磨かれた感性の持ち主は、優れて戦略眼に富むということがいえるでしょう。